本学・建学精神の具現化に努力した研究者

森下　博

はじめに

小坂淳子名誉教授（以下、「名誉教授」を「先生」と記載）は、大阪健康福祉短期大学（以下、本学）の本源ともいえる大阪教育研究所の研究員として、1992年から勤務している。本学の前身である大阪福祉専門学校時代から先生は、社会福祉概論や老人福祉論など社会福祉の分野の研究者として講義を担当してきた。いわば、先生は本学にとって生え抜きの教員の1人である。

本学在任中は、介護福祉学科に所属し、専門分野の研究に加えて図書館長や本学付属・福祉実践研究センター（以下、実践研究センター）事務局長を兼務してきた。

今回、先生の名誉教授記念特集号の原稿を依頼された。私（現在・特任教授）は、今年度を含めて本学の在任期間は、５年である。昨年度まで本学・子ども福祉学科の学科長で、専門分野は教育学。主な担当科目は教育原理や算数教育である。先生とは本学の勤務歴や所属学科、専門分野も全く異なる。したがって、先生の専門分野についての業績などについて紹介できる立場になく、その資格もない。

それでも、執筆するとすればどんな内容のものになるだろうかと考えた。先生と一緒に仕事をした実践研究センターや図書館運営委員などを通じて得た、先生の精力的な仕事ぶりや研究者・教育者として姿勢についての紹介はできる。また、本学の建学の精神に照らして、先生の果たした役割と功績についても、私なりに感じたことを整理し、１つの結論にまとめることならできるのでは、と考えた。これが先生の原稿依頼をお引き受けした理由である。

小坂先生を一言でいえばどんな研究者であったのか。私の結論は、本学の建学精神の具現化に心血を注いだ実践的研究者である。本稿のテーマとの関連で、本学の建学精神とは何であるかを吟味しておきたい。本学の建学の精神は、学生便覧の最初のページに、「教育の理念」として、以下、三点が記載されている。

1．本学は、健康と社会福祉の研究とその担い手の養成をつうじて社会の民主主義の発展に貢献する。
2．本学は、地域と結びつき、地域住民の社会的要請に応えるような、高等教育機関として健康と社会福祉の研究をおこない、その中でも実践的な研究を重視する。
3．本学は、健康と社会福祉の研究と教育の分野で他の高等教育機関と提携し、社会的に開放し、国際交流を図る。

私は、概念整理のために、この理念を①「社会福祉」、②「担い手養成」、③「地域住民」、④「実践的研究」、⑤「開放・交流・提携」の５つのキーワードにまとめてみた。

このキーワードを最大公約数的に考えると、当然のことだがテーマにある研究者は小坂先生ということになる。

先生は、「なぜ、建学精神の具現化に努力した実践的研究者であったのか」また、「先生の実践的な研究姿勢が卒業生や在学生に残したものは何か」について紹介していきたい。先生が社会福祉の担い手たちに残した財産は計り知れない。私自身が先生との共同した実践活動を通じて、先生の研究者・教育者魂を学ぶことができたことは得がたい経験であった。

手持ちの資料と実践研究センターでの諸活動をもとに、先生が本学で果たした役割と建学精神を具現化した活動の事例、その活動のエネルギーの源について可能な限り分析し、紹介できるように、執筆したつもりである。

一．学生・卒業生に残した人間的な財産は計り知れない

１．小坂先生の人柄について―卒業生・在学生のメッセージより

2011年３月に退職されてから、大阪保育研究所付属保育・学童保育専門学院（以下、「保専」）時代、専門学校時代、そして本学の卒業生たちが、先生に対する

退職のお祝い会をそれぞれ３月末から７月まで、毎月のように開催されたという。短大の卒業生主催の会には参加者が100名を超えて集まったと聞いている。また、専門学校当時の卒業生たちは、先生に「最後の講義を、ぜひ聞きたい」と要望したとのことだ。これほど卒業生たちが退職教員のために祝う会をもつなどという話は聞いたことかない。

卒業生たちからのメッセージと先生から卒業生へのコメントを紹介したい。先生の人柄がよく表われている。

> 先生との出会いは、１人きりの入試だったと思います。第一印象は「なんて変わった人だろう」でした。この印象は４年間､かわらなかったです。在学中は振り返れば生意気だったと思います。馴れ馴れしくて多分先生にとってはうっとうしい人間ではなかったでしょうか。保育園に就職し、すぐ辞めた時、周囲は続けようという中、先生のみ「今はゆっくりやすんだら？」と言われ、とても気持ちが救われたのを覚えています。あの時の経験がなければ、今の自分はないといっても過言ではありません。本当に感謝しています。先生は、これからどうされるのでしょう。きっと、楽しく過ごさせるのでしょうね。僕も人生楽しく、人の気持ちがわかる人になれるよう頑張っていきたいと思います。先生に出会えたことは宝物です。

これに対して、先生は、この卒業生に対して、次のようにコメントしている。「養護施設の実践､『福祉のひろば』であなたの書いた文章を見つけた時は、嬉しくて､３センチぐらい飛び上がりました。これからも、子どものおかれている現状を外へ知らせること。実践と研究が結びついていくような仕事師をめざしてほしいな」と、ユーモアあふれるコメントの後に､「外に知らせること。実践と研究が結びつくような仕事師を」と、先生の研究者としての視点から卒業生にさらりと注文をつけている。学生・卒業生から慕われる理由がよく分かる気がする。

次の学生のメッセージは、先生の教育者としての側面をよくとらえている。

> （省略）…私は小坂先生と出会って、人の話をきくこと、そして自分の考えをもってそれを相手に伝えることの大切さを教えていただきました。話し合うことはとても大事なことです。ありがとうございました。やっぱり最後はありがとうございましたになってしいます」と結ばれていた。「“先生”というより“お母さん”…。迷惑かけっぱなしで本当にすみませんでした。400字詰めの原稿と指定したものの、400字では収まらないほどの『ありがとう』と『すみません』があります。先生の情の深いところ、ユーモアあふれる所、ゆるーい考え方な所、いっぱい大好きな部分がありますが、やっぱり一番好きなのは､“ゆるーい所かな”。そのくらいのゆるさがないと、保育の世界ではやっていけないと身をもって教えてくれた気がします。

２人の卒業生のメッセージに共通するものは、もっとも大切にされるべき教育・授業の本質について、先生が大切にされてきたものが何であったかが読み取れる。実にすばらしい教育者であったことが伺える。また、次の卒業生のメッセージは「決めたら一直線」という先生の性格の一面をよくとらえている。

> 先生というよりも、お母さん、12期の保護者って感じがしていました｡学生の時はよく『○○ちゃん、保育のバイトの話があるんやけど、いけるよね』と有無を言わさずトントンとバイトに行かされましたが、今思えばよい経験をしていたなぁと思います。

と、先生の有無を言わさない特有の雰囲気が伝わってくる。この有無を言わさないところも実は後になってみれば先生ならではの私心のない愛情の表れであることが伝わってくるから不思議である。

２．福祉の担い手の養成で、卒業生・在学生に残した財産は大きい

本学には、先に紹介したように、付属福祉実践研究センターがある。センター長である秋葉学長の言葉を借りると、実践研究センターが設置された理由は､「２年間でプロフェショナルとして働く力のすべてを形成することは困難だ。だから、仕事に興味を持ち、働き続ける事ができる条件を大学として準備するため」である。具体的には、研究会活動・資格取得支援・調査研究活動・地域相談活動など「４大バックアップ」として、卒業後の卒業生たちをフォローすることが主な目的である。

小坂先生は、建学の理念実現の重要な柱の１つである実践研究センターの事務局長と重要な役割を長年にわたって果たしてきた。

実践研究センターの大きな仕事の１つに、年１回のケアワーク研究大会（以下、研究大会）の開催がある。この研究大会は昨年度で20回を迎えた。卒業生が孤立することなく福祉現場で働くことができ、研修と情報交流の場となるよう毎年実施されてきたものである。専門学校で介護福祉養成が始まって以来、卒業生によって、100名を越える研究大会になった年もあった。

しかし、介護福祉に関する研修などが行なわれるようになって、卒業生たちにとって研究大会が今までのように絶対必要とされる時代が終わりを迎えていた。

20回記念の研究大会は、参加者数の回復の課題と同時に、内容的にも新たな発展が求められていた時期であった。

19回大会終了の反省会には、在学生も多数参加し「研究大会とは何か」など、次回大会に向けた疑問点や意見を出すところから始まった。それが20回大会にむけた準備会の出発であった。在学生、卒業生がそれぞれ研究大会への希望や要望を出し合い、納得いくまで議論を重ねた。その準備会は、実に19回を数えた。

そうした議論を通して、20回記念の研究大会は、教員・卒業生主導から、在学生・卒業生・教員のコラボレーションによる横並び・参加型の大会へと運営が一新されたのである。

小坂先生は、準備会には軽食を用意し議論に付き合い、最初から最終回まで黒子に徹していた。先に紹介した「決めたら一直線」とは全く違った先生の側面を垣間見ることができた。なかなかできないことだと頭の下がる思いがした。

19回の準備会の議論を通じて、学生たちは実践研究センターの役割やこの20回を迎える研究大会の歴史意義を深くつかむことが出来た。それは私自身にとっても同じことが言える。

したがって、当日の20回大会は、従来とは全く違った、参加型のよさが伝わる雰囲気の中で、展開されたのである。歴史的な大会になったことは準備会に参加した学生・卒業生・教員にとってだけでなく、当日の参加者にも希望と確信につながるものであった。

小坂先生の組織者として優れているところは、その準備会の後も、仕事で疲れて参加した卒業生をしっかりフォローをしていたことだ。そんな心くばりはなかなかできるものではない。先生らしいところである。

このとりくみを通じて、在学生にとっても福祉の専門職への自覚が生まれ、今後のリーダーや担い手の養成にとっても大きな力になったことは間違いないところである。

19回もの準備会をなぜ続けてこられたか、先生が組織者であり、実践者であり、教育者として目に見えないところでの働きが、参加者の心をつかんでいたと考える。私はその役割の重要性を決して軽視してはいけないところだと考えている。

二．開拓者精神の旺盛な実践家・実務家でもあった先生

本学が福祉の専門職養成機関として、卒業生を送り出すだけでなく、アフターケアを重視していることは前項で述べたとおりである。先生が力を注いだ研究大会のとりくみは、本学の建学の精神に通じる重要な要でもある。そのとりくみを通じて、先生が学生や卒業生たちに残した人間的な財産は計り知れないものがある。

私が、先生の活動でどうしても紹介したいものに、「ケアワーク実践・研究集」の発行と「市民公開講座」、「図書館まつり」を挙げたい。

１．福祉実践研究センター発行のケアワーク実践・研究集の発行

先生の得意分野の１つに、冊子の編集発行がある。ケアワーク実践・研究集No.1「実践は理論を築き　理論は豊かな実践を導く」（以下、「研究集」）は、先生を抜きには実現することはできなかったものである。いくら得意分野とはいえ、一冊の書物を発行するには、原稿の執筆依頼から編集、校正など、発行に至るまでは大変な仕事である。この「研究集」は、確かな福祉研究者としての見識が問われると同時に、数多くの福祉施設関係者や卒業生とつながっている組織者でなければ、発行することはできなかったはずである。当然、発行に当たっては、多くの教員や実践家などの協力と共同作業があってのことはいうまでもない。しかし、先生がいなければ決して発行できなかった「研究集」であることも間違いない事実である。

この「研究集」は、本学にとっての“宝”とも言うべき内容である。この「研究集」には、本学並びに専門学校、学院時代の卒業生たちを含め37本もの現場実践が報告されている。その一つひとつの実践報告に対して、研究者や施設長などのコメントが載せられている、実践と理論とが融合した稀有の「研究集」である。まさに、本学の、地域の、福祉の宝物である。本学の「教

育理念」に沿った典型的な成果物であるともいえる。

しかも、その実践の到達をケアワークに位置づけ「研究集」として世に出した点がすばらしい着想であると思う。先生が、長年あたためていた卒業生と研究者をつなぐ、実践と理論の統一をと考えていた夢を具体的な冊子として実現できたことはすばらしい快挙である。講義のテキストとしてこの「研究集」を活用したという報告も聞いている。もちろん先生に言わせれば、「私ひとりが作ったものではない。みんなの知恵と協力でできたものだ」との反論が返ってきそうである。それにしても、私の中では先生の功績は大きく、得がたい研究者であり、実践家・組織者であるということに変わりはない。

2．市民公開講座を開設

次に、先生の大きな功績の１つに市民公開講座の開設がある。この市民公開講座は、地域支援活動の助成事業として、実践研究センターが主催する活動の1つに位置づけられている。

当時、実践研究センターの副センター長であった白井舒久教授（現･本学名誉教授）が地域の高齢者交流（生きいきサロン交流会）に参加した学生たちの感想文集の巻頭に「地域で役にたてる大学が本学の建学理念でもあります。どうかこれを機会に、地域の期待に応えられる大学に」と書いている。市民公開講座もまた、地域に開かれた大学として、市民に役にたてる大学づくりをめざしてとりくんだ企画である。

公開講座は、多くの4年制大学で行なわれている。私が、以前通っていた大学でも公開講座が開設されていた。全国的に著名な講師陣と立派なポスターが印象に残っている。予算規模が全く違うことは歴然としている。

補助金事業とはいえ、講師料や宣伝費、宣伝方法など、公開講座を成功させるには、多くの課題が想定される。行政主催や各種団体主催の公開講座も多く開催されているが、その講演会でさえ、人集めには苦労しているのが現状である。

そうしたことを考え合わせると、本学の市民公開講座を成功させることは至難の業だと考えるのが常識的である。

しかし、先生はそれらの心配より、地域支援の発想にたった市民公開講座の成功に、全力を尽くしたのである。しかも、少ないスタッフで、ケアワーク研究大会と平行して市民公開講座の開催を準備したのである。初年度は３回の市民公開講座を開催した。結果は、予想以上の規模と内容で成功裏に終了することができた。その後、先生が退職された2011年３月まで、15回の講座が継続され今日に至っている。

市民公開講座の成功は、困難な条件を１つひとつ克服してきた先生の意気込みと執念が大きな要因である。堺市や教育委員会の後援をバックに、図書館など行政の関係機関や民主的な医療関係機関への宣伝物の配布依頼を労を厭わず行なった。地域の団体が協力的に応え、支えてくれたのは、先生の迫力のある行動力に負うところが大きかった。地域とのつながりを意識し、地元堺の文化人や在住者にも講師を依頼するなど地域密着型の企画・運営であった。その結果、当初予想もしなかった、依頼した講師の追っかけとも言える人たちの参加者が多く、「この大学を初めて知った」という声もあり地域とのつながりが思わぬ発展をみたのである。

公開講座は回を重ねるごとに、福祉関係者や地域住民や市民にも、本学の存在を知ってもらう機会となった。この事業についても先生の果たした役割は貴重である。

3．図書館まつりの実施

本学では、2006年より藤本文朗教授が当時の図書館長（現在、本学・名誉教授）として、第一回の図書館まつりが開催された。秋葉学長が「図書館まつり」によせての冒頭に、「全国の大学には図書館はありますが、図書館まつりがある大学は他にはありません。学生と教員と一緒になって図書館まつりをしているのは本学だけです」と記されている。

小坂先生が１回目の図書館まつりでは図書館運営委員として、また２回目からは図書館長として図書館まつりをそれこそ全力でとりくんでいた姿を思い出す。私が先生と一緒に仕事をしたのが、１回目の図書館まつりである。その時の図書館まつりは、私に強烈な印象を残した。これほど新鮮で楽しい行事を大学で経験できるとは思いもしなかったからである。昼休みという短い時間ではあったが、学生や教員による紙芝居や朗読・ペープサートなど楽しい企画であった。おにぎりや昔懐かしいひも付き飴が参加者に配られたり、実に、華やかで楽しい企画は参加した学生たちや地域の人たちにも一生の楽しい思い出として心にもしっかり

残るものであった。

また、図書館まつりで、いわゆる階段コンサートが実施されたのである。本学は、とても階段コンサートに耐えうるスペースがあるとは思えないし、狭い階段の踊り場にピアノを置いて、しかも学外の教授の伴奏で本学の声楽の教員が独唱をするのである。聴衆者は階段に座敷指定で座るというものであった。しかし、ピアノ伴奏もソプラノの歌声も実にすばらしく、聞き手も狭い階段で、非常に好感をもって聴いていたのである。この階段コンサートもまた、参加者はもちろん学生にとっても心に温かいものが残るすばらしい行事であった。図書館まつりの一場面である。

階段コンサートの発想は声楽の教員から出されたという。また、まつり成功のために、学生が自前のみこしをつくって、学内を練り歩いて宣伝活動をしたり、装飾をしてまつりの雰囲気づくりをしたりと、「学生と教員と一緒になって図書館まつりをしているのは本学だけです」という学長のことばどおり、みんなでとりくんだすばらしい図書館まつりであった。

と同時に、人をその気にさせ、終わってみればいくつもの困難な課題をもちまえの開拓者の精神と行動力で、打開してきた先生の功績は大きい。図書館長だから当然の仕事だといえばそれまでである。しかし、一緒に仕事をしてみると必ず先生の存在が大きかったというのが、私の先生観である

以上、先生が関わったいくつかの活動を紹介してきた。先生の仕事ぶりを通して建学の精神の具現化を常に意識した実践と活動スタイルに、私は頭が下がる思いである。

三.「普通でない存在としての大学」を願った先生

最後に、先生のエネルギッシュな活動の原動力は何かについて、私の考えを述べたい。

1．先生の活動のエネルギーはどこから

介護福祉学科・別科生の受け入れの課題が浮上した時、大学の今後を考慮し、いち早く受け入れの態度を決めたことを思い出す。生前の横田昌子さん（当時、本学・常務理事）と当時の古川学科長（現副学長）とともに、先生は素早いフットワークで別科生の受け入れにとりくんだ。介護の定数割れや国家試験導入が予想される事態のなかでの決断は、大学の現状に沿った判断であったと考える。

また、先生をすごいと思ったのは、先に紹介した実践研究センター発行の“ニュースレター”（年３回・発行部数900部）、20周年研究大会の開催、「研究集」No.1を発行したことである。この「研究集」は、２月に亡くなった横田さんの追悼集「光り続ける　星が一つ」発行の５ヶ月後、10月３日付けで発行されたものである。もちろん、市民公開講座も平行しながらの仕事である。

横田さんが２月10日に急逝され、その年の５月５日のお別れ会の日に発行された追悼集は246ページに及ぶ立派な冊子である。僅かな期間によくこれだけの原稿を集め、編集できたものだと驚いている。しかも、大学の卒業式や入学式などの最も忙しい時期に、準備したものである。編集委員会4名の中に、小坂先生の名前があるが、きっと、中心的に編集に関わっていたと思う。先生はその一方で、別科生の受けいれ準備という初めての試みの一方で、20周年の研究大会準備も中心的に運営されていたことを考え合わせると、尋常ではない仕事ぶりである。

それだけではない。先生が編集に携わった実践研究センター発行の出版物は、「介護福祉の創設期を担った本学学生　介護の仕事に関する実態調査報告書」と「21世紀福祉・教育シリーズ」の6号を合わせると、数年間という短い期間に、7冊の冊子を発行したことになる。驚きというほかない仕事ぶりだ。

さて、これだけの活動のエネルギーはどこから生まれるのだろうか、いつも不思議でならなかった。なぜだろう、私はそのことを横田さんに尋ねたことがある。横田さんは「彼女は障害をもった子どもさんを育てた上に、研究者として復帰されたのだから、それは筋金入りですよ」と、即答されたことを思い出す。

小坂先生が最近書かれた文章の中に、障害をもつわが子のために仕事を一時ストップし、その後復帰した時のエピソードが書かかれている部分が目にとまった。それは横田さんとのやりとりである。仕事のブランクについて、横田さんから『どんな経験も役にたたないものはないですよ』と言われたという。先生は「私にすると、『失われた15年』という思いについて、そういう経験をマイナスに見るのではなく、プラスにみてくれる人がいた。この出会いによる一言で、障害を持つ子を育てるという経験を前向きにとらえることができたように思いました」と書かれているのである。

小坂先生のエネルギッシュな活動の源は、「失われ

た15年」の中で培われてきた弱者への思いやりと粘り強さ、そして休職していた15年間をプラスとして前向きに評価してくれる先輩との出会い、新しい職場で生まれた信頼できる仲間の存在などがあったからではないだろうか。だからこそ、どれだけ厳しい情勢の中でも、ぶれることなく、権力や資本からの攻撃に対し、弱者の立場に立って敏感に反応し、果敢に闘ってこれたのではないだろうか。

そして、先生が福祉職の仕事への深い愛情と誇りを持ち、福祉職の担い手にたいする温かい心くばりができる実践家・研究者として、挑戦し続けるエネルギーの源となってきたのではないだろうか。だからこそ、あれだけの情熱を持って、開学から退職まで人一倍、福祉養成機関としての本学を愛し活動することができたのだ。そんな気がしてならない。

2.「普通でない存在としての大学」とは、建学の基本理念だ

次の文は、小坂先生が書いたものである。

「1979年の国際児童年を記念してつくられた大阪保育研究所と付属の教育機関は子どもの最善のものを求め続け、その方向性に大学が浮上してきたのだと思います。普通でない存在としての大学には、普通でない教育が求められていると思いますが、短大の置かれている現状があまりにも厳しいものですから、その普通は、特殊ではなく、普通を乗り越えるものでないと支持されないとその後の短大の経験で学びました」と、先生らしい福祉養成機関に対する考え方がにじみ出ているように思った。

以前、先生に「仕事をしていて、一番面白かった時期はいつごろですか」という質問をしたことがある。「短大を立ち上げる準備に加わった時期だった」という趣旨のことが、少し回想的に書かれている。私への回答ともとれる文章である。

「仕事に復帰した最初の頃は、半年は保育運動センターで、４月からは新金岡にある大阪保育研究所に通い始めました。大阪総合福祉専門学校・介護福祉科が認可されて、植田章・堀川久子・岡井敬子（敬称略）などの先生方が専任として、スタート。私は、大阪保育研究所付属保育・学童保育専門学院（以下、保専）の７期生の２年生を担当しました。

保専では、奥谷貞和・美見昭光・堀江直子・水嶋敏子・白石恵理子・上田英子・福島真理（敬称略）などの先生方、ユニークなメンバーがいて、職員会議―教職員の関係性が絶えず更新され、人として育てられたような気がしています。

驚いた事は、専門分野の第一人者の先生方が講師陣として顔をそろえていたことです。最善の利益としての保育士を養成する、介護福祉士の養成に関わっていくという講師陣のみなさんの意気込みに感動しました」と続いている。

先生は、本学の前身である専門学校を経験し、どのような思いで、この短大が設立されてきたかを十分知り尽くしている。どれだけ多くの人々の善意で出来上がってきた大学であるかを実感している。だからこそ、「普通でない存在としての大学」の実現をめざして、実践されてこられたのだと思う。小坂先生は、大阪健康福祉短期大学の建学精神を具現化するために心血を注いで奮闘された名誉教授の称号にふさわしい研究者である。心から敬意を表したい。

おわりに

今思えば、先生と一緒に実践研究センターの仕事をしていなかったら、きっと、実践研究センターの存在意義すら、分からないまま今日に至っていただろう。

先に紹介した本学の宝ともいうべき「研究集」編集には、先生は最初から最後まで中心的に携わっていたにもかかわらず、編集委員長でもなければ、編集委員にも名を連ねていない。すべて、若手の研究者で構成している。ここに小坂先生の次世代を担う人たちへの配慮と育成の思想がある。若手と一緒に作業しながら、結局は育てそして世に出しているという先生一流の若手育成法である。

本稿の「はじめに」で述べたように、私は、先生が退職されるまでの４年間、一緒に仕事をさせてもらった。初年度は、図書館運営委員として、２年目以降は、実践研究センター委員の一員として、市民公開講座やケアワーク研究大会などに関わった。その間に、私は、先生から市民公開講座の講師や講演録発行の機会をつくってもらった。実は、私も卒業生同様、先生に育てられた一人かもしれない。

先生と僅かな期間ではあったが、一緒に仕事ができたことを、心から感謝している。また、今回、先生からの名誉教授記念特集号への寄稿依頼は、大変うれしく光栄なことだと思っている。しかし、不十分な内容のまま原稿を終えることになってしまった。

お詫びをするとともに、今後のさらなる先生のご活躍を願うものである。

＜参考資料＞

1．学生便覧　2011年度

2．福祉実践研究センターNews　Letter

3．「図書館まつり」によせて「学生諸君へ建学の精神を受けながら、堺の生んだ先人，与謝野晶子に学ぶ」 秋葉英則、2008年

4．保育と給食をつないだ人～水嶋敏子さんのお仕事～ 2007年11月

5．光り続ける　星が一つ 「横田さんお別れ会」実行委員会　2010年5月

6．ケアワーク実践・研究集　No.1　2010年10月

＜福祉実践研究センター発行冊子＞

Ⅰ．「介護福祉の創設期を担った本学卒業生　介護の仕事に関する実態調査報告書」2007年10月

Ⅱ．21世紀福祉・教育シリーズ

1「プロフェショナルとして働くということ」秋葉英則　講演録　2008年2月

2「福祉、それは平和の源流」秋葉英則　講演録　2008年５月

3「福祉職の魅力を探る」秋葉英則　講演録　2008年９月

4「『基礎学力』はどのように形成されるのか」森下博　講演録　2009年2月

5「『子どもの社会性』が育つ・育てる－親と教師（保育士）の役割と共同－」秋葉英則　講演録　2009年7月

6「スライドで学ぶ認知症の知識と理解とケア」永松孝志　講演録　2010年5月